

表現できない世界の豊かさを 読み取り意味付ける能力を



静岡大学教育学部 馬 居 政 幸

1. はじめに

私はここに再現された稲葉先生の授業を直接参観した者の一人である。全国から集った千名近い先生方の間をすり抜けて自分たちの活動を夢中で創造する子どもたちのバイタリティに、あるいは先生方をかきわけながら大阪弁まるだしで子ども一人一人に声をかける稲葉先生のダイナミックな動きに、生活科の授業ならではの醍醐味を味わうことができた者でもある。その時の感動を思い出しつつ再現授業を読ませていただいた。

言うまでもなく、授業の全てを紙上に再現することは不可能である。それ故、どの部分をどのような方法で再現するかに、再現者の授業の見方が問われることになる。特に授業者の場合、そこに授業づくりのエッセンスが込められなければならない。とりわけこのことは生活科の場合に重要である。“教師が教室で教科書を教える”という従来の授業の条件（環境）を、“子どもたちが多種多様な活動を創造しあう場”に再構成することから、生活科の授業づくりは始まるからである。

その意味で、当日の感動を蘇らせてくれた稲葉先生の授業再現の特性に学ぶことから、生活科の授業の見方に対する私見を提示したい。

2. 子どもの普段の思いから出発

まず「1. 授業の計画」の「3指導にあたって」は、通常は教師の授業に対する意図が論理的に記述される部分である。だが、稲葉先生は「今日は

つまらないな、遊べないもの」と、雨の日の思いを教師に話しかける子どもの言葉（会話文）から書き始める。一応は教師として「雨の日の休み時間でも楽しく遊べるものを作ってみよう」と提案するが、「物を作ることも好きだが、それ以上に作ったもので遊ぶのが好き」と、あくまで子どもの思いを優先する。教師が望む「活動の広がり」も、教師の働きかけからではなく、「友だちの作品のよいところを知り自分の作品に生かす」ことに求める。おまけに、子どもたちが作って遊ぶゲームの材料は「身の回りにある」ものである。

稲葉先生が「雨の日も楽しく」という単元に込めた意図は、文字どおり子どもたちが雨の日も晴れの日と同じように楽しんで遊ぶこと自体であって、何かを教える手段ではない。もちろん、子どもに気付いて欲しいことはある。だがそれは教師が教えるのではなく、子どもたちが楽しく遊ぶ過程で自ら学び取ることを願ってのものである。そのためには、遊び道具も、教師が特別に準備するのではなく、子どもたち自身が身近なものを工夫することが必要というわけであろう。

このような子どもと授業への観点は「(4)単元の目標」、「(5)指導計画」、「(6)本時の学習」のいずれにも確認できる。たとえば「展開」の「教師の働きかけ」では、活動の開始が示されるのみである。「指導上の留意点」でも、自由に遊ぶことができ、ゲームの改良と修理ができる「場所の設定」と「安全」について記すのみである。子どもの「反

「単元指導計画では、活動の発端を児童の興味や関心から生まれておくようにしておくことや、学校活動が児童の日常生活に連続していくことを大切にしたいものである。また、学習活動の中で、児童の日常生活や他教科、領域等との関連が十分図れるような配慮をしておくことが大切なことである。」として必要を例示している。

- ア. 児童のもつ疑問や関心等活動の発端となるもの
- イ. 想定される児童の活動や体験の姿
- ウ. 教師のかかわりとそのねらい
- エ. 指導上の留意点や他との関連、発展の予想等

(5) 本時の学習計画

- ①小単元名
- ②本時の目標、③展開、では、グループ毎の計画や活動予想など（稲葉先生が本時の学習の中で提示した表など）が欲しいところ。また、活動の場の設定の工夫などが入ると、指導上の留意点が具体化され、展開に当たって子どもの活動とのつながりが見えるようになる。

2. 実際の授業

(1) 「雨の日は楽しくないの？」

「傘をさして、歩き回るのも楽しいのにな。教室で静かにするのは嫌だな」この子どもの発言は気になるところである。「でも、運動場が傷むだろうな」「そうだね、残念だな」と続く中で、雨の日でも外で遊べるのではないかな。運動場だってみんな考えれば、傷まないようにできるのではないかな。副校長先生に聞いてみると運動場でも雨の日に遊んでよいところがあるかも知れないよ。というような発想をする子どももいたものと思われる。もしそうであれば、こここのところをていねいに掘りおこしてあげたい。それは、そのことにより、個々の子どもが知恵をしぼるからであ

る。主体的に子どもがアタックする中で、学校施設利用のルールを体得するチャンスである。また、子どもたちの願いを広げることにつながり、学校の主体者であることを実感するチャンスでもあったのではないだろうか。

この点については、1. 単元構成について、において関連的に述べておいたところである。

(2) 本時の活動における教師と子ども

公開される授業であるということも多く制約の中で先生にとっては不満足な状況と言わざるを得ない。しかし、子どもたちはちがう。活動の場所がいつもとちがう、大勢の参観者が囲む、という状況は魅力的でさえある。特に、今まで努力し協力して作ってきたゲームなどを自分で楽しむだけでなく友達にも提供する。そして、友達の反応から次の工夫のヒントを得ることができる。

加えて、参観の先生方が、自分たちのおもちゃに強い関心を示してくれる。工夫したところを説明すると目を輝かせて聞いてくれる。遊ばせてくれるように頼まれる、これらが表情に表れる。

これらの喜びは、「先生、もっと続けようよ。」という子どもの声に反映している。

(3) 生活科ノートの活用

言語的表現に活動をつなげることは、活動の振り返りにより、その実感を定着させ今後への発展につなげるために欠かすことのできないことである。特に、目的的活動の吟味として2年生では大切になりたい。

紙幅の関係で、吟味ができないが、稲葉先生の“授業の見方”についての検討は、子どもが真剣に表現しているこのノートをもとにできると言っても過言ではないと思う。

さいごに

「子ども生き生き」の姿を拝見したことに心から感謝し、今後の一層の充実を期待申し上げたい。

応」と「活動」の予想はあるが、それを促す教師の働きかけは記述されていない。

生活科の意図は理解できるが準備が大変、という先生方の不満を聞く機会が多い。だが、「授業の計画」を読む限り、稲葉先生はほとんど準備らしい準備はしていない。また、生活科の目標を活動として具体化する方法がわからない、という質問を受けることも多い。これも稲葉先生は非常に単純である。子どもが楽しんで互いにゲームを遊んで遊ぶことしか読み取れないからである。

「授業の計画」に示された教師の役割は、①子どもの意欲を見出し、②それを子どもたち相互のかかわりの中でより大きく育むための条件を整備し、③安全性を保つことの三点のみである。生活科に限らず、多分これほど簡明な目標や指導計画はないのではないかと。私の手元にある稲葉先生の他の生活科の指導案でも同様であることから、本稿の紙幅の制限からではなく、稲葉先生も含めた天王寺小の先生方の生活科観に基づくものと考えられる。では実際の授業過程はどのようなものか。

3. 多様な子どもの遊ぶ姿を求めて

「2.授業の実際」の「(1)雨の日は楽しくないの？」では、「本時の活動」に至る過程が教師と子どもの会話により説明される。その構成上の特色は、一方で会話の主権は子どもにおき、他方で教師による子どもの真意を探り潜在する意欲を掘り起こすための問いかけが適宜挿入されていることである。先に指摘した教師の一つ目の役割を具体化する実践過程を明示しているといえよう。

「(2)本時の活動」では、〈授業の準備〉から〈授業の開始〉をへて〈授業の終わり〉に至るまでの過程を、授業の進行とともに変化する子どもと教師の姿を写した15枚の写真とそれに関連する会話文を中心に再現されている。ただし、稲葉先生が登場するのは4枚、あとは子どもたちの活動

する姿の写真である。また文章の方も、授業開始時とゲーム交代時の説明ならびに終了時の子どもとの対話以外は、全て子どもの話し言葉の再現もしくは子どもの多様な現れの描写である。

授業結果の評価に相当する部分は、子どもたちの自己評価である「3.生活ノート」からの抜粋である。教師の授業後の反省（自己評価）に当たる「4.授業を終えて」も、子どもの言葉を中心に、この活動で育まれた子どもの変化の評価と「だれも遊びに来てもらえなかった子ども」のフォローの結果の紹介である。「この授業で見て戴きたかったこと」という観点から提示された「5.私の授業の見方」は、いずれも子どもの作品や子どもの現れに関するもので、教師の行為に対するものは皆無である。「6.最後に」でも、あくまで子どもの現れにこだわることから、公開授業故のマイナス面よりもプラス面を活かそうとする教師の思いが込められた内容でまとめられている。

以上の再現内容により、稲葉先生の生活科授業づくりの視点がどこにあるかが理解できよう。

4. 写真と話し言葉が再現する世界

写真と会話文の多用、これが準備段階から活動過程へと展開する「授業の実際」を再現するために稲葉先生が用いた方法である。また、他の部分においても、写真はなくとも、そのほとんどが子どもたちと教師の間に生じた具体的な行為についての会話文を主体にした記述である。

会話を構成する口語は、その言葉が発せられる個別的・具体的なシチュエーションに依存する言語である。そのため、会話文は普遍的・抽象的な論理を展開するには不向きな言語表現である。逆に、ドラマの台本のように、巧みな会話文は会話が交換される現場を浮かび上がらせる。その意味で、会話文の方が、抽象的な概念による論理的記述よりも言語が表出する場の状況を読者の心にとり

アルに想起させる上で優れているといえよう。

もっとも、教師(T)と子ども(C)の会話で授業を記録する方法自体は新しいものではない。だが、稲葉先生の場合は次の二点で異なる。

一つは文脈の相違。通常の授業記録のように、教師の働きかけ(問い)と子どもの反応(答え)の繰り返しではなく、子どもたちが自由に活動する過程で自在に発する多種多様な言葉と臨機応変に対処する教師の言葉により文脈が構成されている。もう一つは写真の併用。通常の授業では言葉が生じる場の条件(教室、教材、教師と子どもの関係)は固定されているため、場面を再現する必要はない。だが、生活科は子どもの現れ(言葉、表情、身振り、作品など)のみでなく、場自体が多様で可変的である。このような子どもの現れとその場面をともに再現する方法として稲葉先生が用いたのが写真と会話文の併用である。

他方、「生活ノートより」は子どもの作品の紹介である。「私の授業の見方」は活動過程で子どもたちが互いに表現しあう世界を捉える観点のみを提示し、教師の授業(教育)行為については言及していない。さらに何よりも、この再現授業記録全体を通し、抽象化された概念を用いての活動過程や子どもの状況に対する稲葉先生自身の理論的な説明文は全くといってよいほどない。

以上のことから、写真と会話文を多用する稲葉先生の授業再現の意図は、準備段階から評価に至るまで、教師の授業行為ではなく子ども相互の多様な現れを、それを現出させるシチュエーション(場面)とセットにして、可能な限りリアル(あるがまま)に表現することにあると考える。

5. 再現しえない世界の豊かさを

稲葉先生の再現方法のもう一つの特徴は、「授業の計画」のみでなく全体として表現が簡潔であることである。他方、実際の授業は非常にダイナ

ミックであったことは冒頭で指摘した。その一端は、写真と会話文を駆使して再現された「実際の授業」により読み取れるはずである。

思うに、生活科に限らず教師の準備が過度になる原因は、教師が自己の枠組に従って子どもを動かそうとするからではないか。子どもが自己の意欲を基に互いにかかわり合う過程で育つことを願うならば、準備も含めて子ども自身に任せざるをえない。自ら立つための基礎は自ら学び取るしかないはずである。重要なのは、子どもの現れの豊かさとしてそれへの係わり方である。だがそれは抽象的な概念で論述できるほど単純な世界ではない。それ故に稲葉先生が用いた方法が「授業の計画」の記述の限定と「実際の授業」に現れた子どもの姿の写真と会話文による再現であったと考える。

ただし、写真で表現できるのは現実の瞬間を切り取った世界である。会話文も子どもの言葉そのものではない。実際に飛び交ったのは大阪弁である。それ故、ここに再現された世界は、事実であるとともに、稲葉先生が理想とする子どもの育ちの姿でもある。この事実と理想の間を結びつけ意味づけるのは読者の生活科授業読解力(リテラシー)である。この見えない世界を読み取り意味づける能力を読者に期待して、再現されない世界の存在とその豊かさを暗示するために、稲葉先生が用いた方法が表現の簡潔さであると考える。

子どもの思いに始まり(「指導にあたって」「雨の日は楽しくないの?」)子どもの思いに終わる(「生活ノートより」「授業を終えて」)。だからこそ見て戴きたい(再現する)対象は、子どもの多様な現れ(写真と会話文)を手掛かりにした豊かな子どもの育ち(再現されない世界)であって、教師の理念や指導ではない(「私の授業の見方」「最後に」)。これが稲葉先生による授業再現の特性から読み取った私自身の生活科の授業の見方(作り方)の基本的な枠組である。

はじめに.....滝沢 武久 1

特集1 生活科の授業作り

- ◆ 授業で育つ子どもと教師——1年「ぼくやわたしの南が丘小」「冬の探検」.....吉田 豊香 4
- ◆ 学習活動に必然性と連続性を生み出す「活動活性化単元」.....丹伊田弓子 10
——「たのしいよ すてきだよ ぼくたち わたしたちの町」
- ◆ 大学における「生活科の授業」はどうあればよいか.....有田 和正 16
- ◆ 大学における生活科の授業——その実態と展望.....奥井 智久 22
- ◆ 期待をいだかせる展開——四人の先生の実践記録を読んで.....安部 康美 28
- ◆ 4人の先生方の論考から学んだこと.....日台 利夫 34
——生活科の授業づくりの視点とその方法を探る

特集2 私の授業の見方

- ◆ つちやすなであそぼう.....津川 裕 40
- ◆ 生活科の授業の見方.....川上 昭吾 48
- ◆ 津川裕先生の授業から学ぶこと——1年「つちやすなであそぼう」.....椎名 仁 51
- ◆ 雨の日も楽しく.....稲葉 正治 54
- ◆ 天王寺小学校稲葉実践に学ぶ——2年1組「雨の日も楽しく」.....倉澤 達雄 62
- ◆ 表現できない世界の豊かさを読み取り意味付ける能力を.....馬居 政幸 65

私の生活科像

- 自分を信じる“うめぼれや”を育てたい.....平山 許江 68
- 生活科からの発想.....白樫 静江 70
- 「マーフィーの法則」生活科バージョン25.....樋口 雅子 72
- 教育改革運動としての生活科.....市川 克美 74

- 「探究——コミュニケーション」の構築をめざして.....森 透 76
- 不断のチャレンジと創造.....宮本 三郎 78
- 毎日が喜びに満ちる生活科——成長への5つの視点を考える.....田中 光順 80
- もしも“自由にやれる生活科”を考えるとすれば.....山口 令司 82
- 生活科の授業を参観しながら考えたこと.....矢野 英明 84

自由稿

- ◆ 遊びをめぐって.....藤崎真知子 86
- ◆ 場所への愛着を核とした生活科の授業.....無藤 隆・山田 誠 92
- ◆ 柳田国男の民族学と生活科教育——「前代教育法」に学ぶ.....谷川 彰英 98

私の地域の生活科

- ◆ 秋田の“おぼこ”生活科.....浜田 純 104
- ◆ 民話を活用した生活科——「でいらぼっち」をおいかけて.....古川 鉄治 108
- ◆ 新潟の豊かな大地に根ざして.....五島由美子 112
- ◆ 季節感を実感させるための工夫——秋とあそぼう.....森下規代子 116
- ◆ 百間川の春夏秋冬.....家光 大蔵 119
- ◆ どうすれば活動の連続発展がうまく図れるか.....寺尾 慎一 122

- * 日本生活科教育学会会則..... 126
- * 学会だより..... 127
- * 編集後記..... 128

明日の教育を創る

せいかつか

SEIKATSUKA EDUCATION

創刊号
1994



せい
かつ
か

SEIKATSUKA EDUCATION

創刊号

1994

日本生活科教育学会

日本生活科教育学会